

はじめに——私たちが昔話になる日を夢見て

昔話の中には、たくさんのエキセントリックな女性がいます。彼女たちはひどく不親切だったり、恐ろしく身勝手だったり、気まぐれで猟奇的だったりします。

たとえば、「浦島太郎」に登場する乙姫は、開けると老人になる玉手箱を何の説明もなく贈ります。「竹取物語」のかぐや姫は、求婚者たちに無茶なプレゼントを求めます。「古事記」「日本書紀」のイザナミは、腐敗した姿を見られたことに激怒し、黄泉よみの国まで会いにきてくれた夫に襲いかかります。「怪談 牡丹灯笼」のお露つゆは、每晚好きな男の家の周りをうろつき、憑り殺としてしまいます。

ストーリー上では、彼女たちはまるで血も涙もない悪女ツェンファメルです。

しかし、本当にそうでしょうか。

昔話は人間によって作られ、人間から人間へと伝えられてきました。長い時間をかけて受け継がれた物語には、人々の願いや思惑が降り積たかもります。作者や、語り手や、読者は知らず知らずのうちに登場人物に「果たすべき役割」を背負わせます。

彼女たちの「役割」を取り払い、素顔を覗きこんだとき、そこにいるのは私たちと変わら  
ない一人の女の子——血の通った一人の人間なのではないでしょうか。

決められたストーリーから抜け出した彼女たちと、友達と喫茶店でコーヒーを飲む時のよ  
うに話し込みたい。「あの時」、考えていたことを教えてほしい。

——むかしむかし昔々、マジで信じられないことがあったんだけど聞いてくれる？

これは昔話の女の子たちと「ああでもない、こうでもない」と文句を言いあったり、悲し  
みを打ち明けあったり、ひそかに励ましあったりして、一緒に生きていくための本です。

時に勇気づけられ、時に憎んできた物語の行間から、必要なものだけを掬いあげ、明日も、  
明後日も生き続けていく糧かてにする。

現代をたくましく乗り越えて、今度は私たちが幸福な昔話になる日を夢見て。

はらだ有彩ありさ